耳を傾けたい巷にこそある知恵

近くの酒屋に足を運ぶことが増えている。酒を買いにいくだけではなく、酒屋で月二回、水曜の夜開かれる民謡教室への参加のためである。生徒三、四人のごく小さな教室で、先生も町内の住人。身近な集まりだが、先生は全国大会で日本一に輝いたことのある実力者。教室に行って、こうした存在が近所にいることを初めて知った▼生徒の一人が酒屋の女店主であるが、練習の途中で時折いなくなる。聞いてみれば、酒を買いにきたお年寄りを車で家まで送りにいってきたという。お年寄りは酒屋まで買い物に来ることはできても、重い酒を持って家まで歩いて帰ることができない。年寄りにとってはありがたい、ということで、練習を横に置いて話は盛り上がった▼都会でも高齢化ははげしく、買い物を届けるシステムなしではすっかり売れなくなってしまい、周辺のスーパーはいずれも配送してくれるようになっているとか。ただし、配送料金は買い物代金に上乗せされる。「うちだけじゃない」ということで競合は激しく、店の売上は往時の一〇分の一にまで減少。「商売で生きていくのは本当に大変だ」との話に実感がこもる▼スーパーはレジも配送も別人による分業で、対応はマニュアル的。客との対話はほとんどない。自分たちは何でも屋で、日常的な触れ合いをもとにいろいろの情報を持っているのが強み。会話を楽しみにしているお客も多い。大手の隙間こそが商売生残りの砦。商売とはコミュニティ・ビジネスなのだ、と宣う▼巷は逞しく生きた知恵にあふれ、教えられることばかりだ。　（土着菌）